



共識不苟名

朱子詩集卷之二

新装版

かたつむりの詩

う
た

禅堂つれづれ物語

かたつむりの詩^{うた}

目
次

序

勇音さんの『かたつむりの詩』によせて
けたたましい情報化社会への救援のシグナル 川畑 愛義

佐々木良作

撥叢參玄	はつそりさんげん	18
庭詰	にわづめ	20
旦過詰	たんがづめ	26
参堂入衆の前晚	さんどうにしう	29
新到参堂	しんどうさんどう	30
相見	しようけん	34
入室参禪	いっしふさんぜん	40
叢林	そうりん	45
托鉢	たくはづ	48
鬼と姫と	きとうひと

提唱	ていしょう
四九日	しきゅくにち
把針灸治	はしんきゅうじ
接心——その前夜	せつしん——そのまえよ
總參	そうさん
慈悲行	じひぎょう
放參日——休日	はうさんび——きゅうび
作務	さむ
點心	てんじん
常住	じょうじゅ
常住	じょうじゅ
常住	じょうじゅ
副隨と殿司さん	ふすまいとでんじさん
常住	じょうじゅ
夜坐	やざ

ドヤン飯	雲水たちのコンパ	139
大会加担	……	136
半夏大接心	のころ	132
ドヤン飯	雲水たちのコンパ	129
食堂	……	125
食堂	饗応	122
じきどう	じきどう	119
涅槃会	ねはんえ	115
修正会	しゆしようえ	111
餅つき	……	107
遠鉢	えんばつ	103
施餓鬼	せがき	100
講中斎	こうじゅうさい	97
延寿堂	えんじゅどう	……
起單留錫	きたんりゅうしゃく	……
彼岸托鉢	ひがんたくぱつ	……

暫暇帰坊
ざんかきぼう

語をさがす——句双紙と世語集
ご くぞうし せいしゆう

正念相続
じょうねんそうぞく

初閑透過
しょかんとうか

初閑透過——放下著
しょかんとうか ほりげ じらふ

初閑透過——ほうろく千枚、かなづち一丁
しょかんとうか ほうろくせんまい、かなづち いっぢやう

辭去下山——かたつむり山を下りる
じきよげさん

禅語のてびき
ぜんごのてびき

あとがき
あとがき

見返し画・元大徳寺派管長

伝衣室円山要宗老師

序

勇音さんの『かたつむりの詩』^{うた}によせて

衆議院議員 佐々木良作

高橋勇音さんは浅からぬ因縁がある。たぶん、昭和十一年であつたと思うが、私は旧制の松本高校から京都大学に移つた。その年の夏、少し本を読まねばと思って、法律書を行李に詰め、信州を訪ね、保福寺という禅寺に落ち着いた。松本郊外の、塩尻の方に向かう山腹の、展望絶景ともいうべきお寺であつた。庭に形のよい赤松が二本あつて、そのためには松の寺ともいわれた。

ここに大徳寺禪堂で修行中の一人の雲水がいた。それがのちの勇音さんなのである。ちょうどお盆であつたせいか、京都から帰つてきていた彼は、暇をもてあましていた私にとつて、誠によい話相手となつた。その彼から、「佐々木さん、大徳寺の隣寮が空いているが来ないか」と誘われたのである。

そしてさつそく、その年の秋から、私は大徳寺山内に移り住むことになつたのであ

る。以来、卒業まで約二年半、大徳寺山内総見院の隠寮が、私の住居となり、勇音さんとの交友も一段と深まつていった。そして「門前の小僧」となつた私は、彼を通じて禅の世界をかいまみるチャンスにも恵まれたのである。

当時私は、学友達と『椎の葉』という俳句の同人誌を作つていたが、その中に「庭詰のこと」という随筆を書いたことがあつた。この同人誌は、その後の戦争と激しい変化の中で、あとかたもなくなつてしまつたが、当時の仲間達の頭の中には、良き時代の思い出として鮮明に印象づけられており、随筆「庭詰のこと」も記憶の中に生き続けていた。だから私は、勇音さんから、序文の依頼とともに届けられた『かたつむりの詩^{うた}』のゲラ刷の最初の頁に「庭詰」という文字を発見して、何ともなつかしく、感動したのである。

しかし実は、私が京都を去つて以降、勇音さんのことは私の脳裏から次第に薄れていつてしまつていた。

それは、支那事変がますます拡大の一途をたどり、私の卒業も間近にせまつっていた

ころだつたと思うが、こんなことがあつた。ある日、勇音さんが隱寮に私を訪ね、雑談の後、いとも簡単に「わしは大陸に行つてくるわ……」と、思いがけない言葉を残して、驚いている私には一向かまわず、飄々と門の外へ消えていつてしまつたのである。

それつきり、私との連絡は途絶えてしまつていた。ところが、それから四十年近くも過ぎた、昭和五十一年の総選挙の時、私は遊説で松本を訪れたのだが、その駅頭に、勇音さんが忽然と現われたのである。「ポスターを見て迎えに来てみたのだが、佐々木さん、わしがわかるかい」などと、ケロツとしているのである。誠に誠に、思わざる再会であつた。

無信心の私のこととて、禪修行の実体などわかりようもないが、私は禪坊主が好きであり、禪寺の環境にもひかれるのである。あの峻厳でいて、心が清らかに休まる空気がよい。民主主義というものが、本来そうなのかもしれないが、言葉過多の現在世相の中で、ずばりと本音だけをいい、決して「説明」を加えない、禪坊主の姿勢が好

ましい。「禪は講ずべからず、参ずべし」なのであろう。

しかし、この『かたつむりの詩』^{うた}は、禪僧教育の唯一無二の機関である僧堂を、しかもそれは本来閉ざされているものであるのに、その僧堂を雲水生活とともに、一般に開放し理解させようと試みているのである。本来、閉ざされているものを、なるべくならば「説明」という方法を用いないで、理解させようとしているのである。著者は、この自己矛盾を百も承知の上でこの難問に取り組んだのであろう。それ自身一つの公案のようだ。

私はなつかしさにかられながら、一瀉千里^{いっしゃせんり}にゲラ刷の頁を追つたのだが、途中で難解な文字に出合うことが多く、たびたび立ちどまらざるを得なかつた。そして、そのたびごとに、「説明」の下手な著者が、懸命に一般人にわからせようと、苦心惨憺しているありさまを思い浮かべ、意地悪い笑いを噛みしめたのである。

著者の努力にもかかわらず、なおわかりにくい箇所が少なくはないが、私は敢えて読者諸君にお願いしたいことがある。それは、この本はいそがず気楽に、ていねいに

読んでいただきたいことである。また、一回よりは二回、二回よりは三回と、回を重ねて読んでいただきたいのである。読むたびごとに味わいが深まり、味も変わってくるし、何よりもそのたびごとに一段とおもしろくなるからである。

昭和五十八年十月

けたたましい情報化社会への救援のシグナル

京都大学名誉教授 川畑愛義

著者の高橋勇音和尚さんが、どんな偉そうなことをいつても、どこか田舎の爺さま臭いというか、もっとひどい言葉を使えば、やぼつたいところがみえる。

本書をひもときながら、ふと、

山寺の和尚さんは

鞠は蹴りたし、鞠はなし

の童謡が頭に浮かんできた。そしてこの和尚さん、たいして文才にも世才にも長けてなさそうで、ネコを紙袋につめ込んでニヤン、ニヤン鳴かせるほどの芸はなさそう。せめてゆっくりと露草の葉の上を歩む、かたつむりの詩うたでも聞かせようという算段らしい。

はてさて、かたつむりの詩うたなんて今までの臨濟の公案にあつたのか、なかつたのか。そんなことを考案することは一つの迷公案なのかも知れない。

この名著（？）、見るほどに、読むほどに、野狐禪やこぜんのくさみがなく、歯ぎれがよく、壮快であり、すがすがしい清涼感を与える。それどころか、静かに拝讀に及ぶとき、和尚さんなかなかどうして、仰げば山より高く、もぐれば海より深いところがあるようで、ちよいと計りがたいな、と思つたりもした。

実は、私は京大の教師時代、夏休みの約半分近くも、和尚さんの神宮寺の本堂の奥室にこもって世間学をしていたことがあった。

いわば行を修めない門内小僧的存在であった。でも和尚どのがあまりに気さくに、あっけらかんにつき合つてくださつたので、ついつい慣れそめ、慣れっこになり、この法師を普通の俗人のように考えてしまつっていた。

ところでこのたび本書を改めて読むに及んで、大哲は大愚に似たりという言葉を思ひ起こした。

もともと禪は不立文字ふりゅうもんじとか只管打坐しかんたざなどとか称して、その修行の方法や道程を語ることをあまり好まなかつた。しかしそれではこのようなスピーディーな世の中に家業や学習をふりすべて入門（掛搭）するとか、入山するとか、そのような悠長なことは滅多にできそうもない。

こうした人たちにも縁なき衆生は救い難しとつぱねないで、ともかくおいでよ、やつてみたまえと救援のシグナルをあげるのが本書のねらいか意義かと推察される。

漢字が多いし、初めはちょいと近づきがたいようであるが、読みすすむうち、やさしい説明、到達した道心、しかもいたるところ軽妙しやだつのユーモアもあって、手にしたら終わりまで手放しがたいのは決して小生だけではないであろう。

ふと思つたが、その昔、中国で道心を起こして悟道に至るまでを画いた彼の巨徹禅師の十牛図のこと。これは正しく昭和版「十牛図」解説書ともいえようか。

現代はけたたましい情報化の時代ともいわれて、国際社会の中でいかに急速に、いかに精密な情報を先取するかが、サバイバルへの道であるともいわれる。当たつても当たらなくともクジをひき、クイズをためしてみる。当たればよし、当たらなければもともとというような考え方が充満しているかに見える。

しかし眞実は、そのような場当たり的、あるいは利那的な思考や行動の中からは決して生まれてこないであろう。声なき声、姿なき姿、その無次元の世界にこそ眞如法相の明月は照つているにちがいない。

著者は次のようにも記している。「見性は、知識や学問を媒介としない。動におい

ても、静にあつても、寝ても覚めても、そのことへの思いを保ちつづけることによつてのみ具現する」と。

このような厳しさ、冷たさ、そして徹底性の実践が現在、なお生き生きと語られるところに、大きいくいえば、日本民族の救いがあるようさえ思われる。

よろよろうごめくかたつむりは、また、あるとき次のようにも歌つていた。

「厳しくも世知辛い世の中に、安神して修行に専念できるのは、篤信の外護者や信者の方々の尊い供養によることはいうまでもない。この恩に報ゆる修行者の道はただひとつ、悟りの眼を開くことである」と。

※初版本の序文を再録しました。

かたつむりの詩うた

はつそうさんげん
撥叢参玄

撥叢参玄。草を払い、玄妙な仏法に参ずることで、あんぎや行脚ともいう。禪の修行のために旅に出るという意味である。それは単なる旅と違い、心地の風光、すなわち見性けんじょが目的の旅である。

「ナズナやツリガネ草を人参とまちがえるな」という古い語がある。行脚僧は何を求めて、誰をどこへたずねるかの出発点がたいせつである。慈味あふれる明眼みょうがんの師にあうとき、その法味を充分に吸収して、お悟りという到



着駅に立つことができる。ナズナを食うか、人参を味わうかは、かかるてその出発点の願心にある。

弟子入りして住みなれた寺をあとに、ひとり旅のできるまで長年撫育ぶいくされた師父に別れを告げるときはきた。大志大願を抱く雲水もまた人の子。美しく剃つた頭であつても、うしろ髪をひかれる思いである。

その旅装は、墨染の衣に白地の脚絆きやほん。なかなか粋な姿である。師から与えられた袈裟、持鉢（食用の重ね椀）、剃刀、講本（多くは臨濟錄や禪關策進）は袈裟文庫（縦三四センチ、横二五センチ）という小さな箱に納める



か、あるいはくくりつけられる。若干の着替えに合羽などが前後に振り分けにされる。そして網代笠^{あじろがさ}を手に、弟弟子や縁者に見送られ、無言で深々と一礼して出発する。

このように、修行僧の荷物はいたって少ない。人間的な所有欲への無言の抵抗であるかのごとく、必要最小限に簡素化され、あるだけの荷物はすべて身につけられてしまう。だから雲水はでんでん虫（蝸牛）^{かたつむり}にたとえられさえするのである。

禪の先徳は、集めることは苦しみの初めであるといわれ、すり鉢ひとつさえあれば味噌も摺れるし、禪^{ふんどし}も洗えると、無駄のない簡素な生活に徹したものである。

庭詰 にわづめ

冬扇 忘れまいぞや 一大事

扇子は夏に使われ、冬には無用というのが一般の通り相場である。が、禪僧の挨拶には扇は四季を通じて欠くことができない。座ると、自分の膝頭の前に扇を横にして、



その上に頭を下げる。

一大事。それは人生の最大の目的。つまり、人間はどこから生まれ、どこへ死んでゆくのか、という宿題に、桶の底がぶち抜けたように明確な答えを出さなくてはならないのだ。これを一大事の因縁という。扇子と一大事因縁はいつでも、どこでも、寝ても覚めても忘れてはならないという警句である。

渡世人の挨拶は「仁義をきる」というそなだが、雲水にもまた紋切り型の挨拶がある。目的の道場に着くと、玄関の式台の一隅に腰を掛け、文庫を自分の前にして、その上に両掌をそろえて、低頭伏顔し、「タノミマショーッ」と来意を告げる。このときから、入門第一次試験ともいすべき庭詰が始まる。彼は用意して来た掛搭（入門）願書も提出しておかなければならぬ。

しばらくの間がおかれで、重々しく「ドーレー」という応答とともに、取り次ぎの僧が現われる。彼はていねいではあるが、きっぱりとした言葉で掛錫（入門）を拒絶する。実にていねい無礼そのものである。



拒絶の理由は、道場の満員が第一にあげられる。また、この道場は規矩（規律）が厳しいので、他の道場へ赴かれたいなどと断られる。しかし、これらの拒絶の口上は建前であつて本音ではない。もしも雲水がこの断りを真に受けて辞し去つたとしたら、彼の掛錫する僧堂はどこにもないだろう。どの僧堂へ行つても、同様の拒絶にあうからである。

取り次ぎの僧は、この拒絶を与えるときさと引きこんでしまうのだが、行脚僧は、初めにとつたのと同じ姿勢で、ひたすら懇願をつづける以外はない。一大事因縁のために身命をなげうつ決心をますます強固にして、庭詰に入る。

このごろは、目的貫徹の手段に「座り込み」というのがあるが、座り込みの家元は禪僧である。叩かれても、おどされても、じつと座り込んで動かないのが、庭詰といふ一種の座り込みである。

掛錫（入門）を許されるまでは、一種の強制姿勢で、ひたすらに懇願する。その一

日は長く、からだの節々まで痛む。石の上にも三年というが、忍辱（忍耐）の生活体験なくしては、とうてい三昧無礙の境地には至り得ない。

あれから十時間、午後四時、静かな足音が聞こえてきた。そして、重々しく低い声で、「ご投宿を」といわれた。案内の雲水が、肩からはずした文庫を持つてくれて、内に招じ入れ、小さな部屋に通された。

この部屋を旦過寮という。旦になれば去るという意味である。出された投宿帳に受業寺（師匠の寺）の住所とみずから氏名を墨書し、押しいだいて返す。投宿帳の表紙には明治〇年起と記されている。有名無名の先輩たちも、この部屋で初行脚の一晩を過ごしたかと思うと感無量である。

ていねいな言葉や動作とは反対に、温かい寝床は望むべくもない。複子（荷物）を前に結跏面壁して坐り、夜明けを待つのである。

午前四時、朝課（朝のおつとめ）、粥座（朝食）が終わると、昨日の雲水が来て、波茶を一杯ふるまつてくれ、「ご自由にご出立を」との一言を残して消える。

そこで、ふたたび草鞋の紐を締め、文庫を肩にして玄関に行き、あらためて「タノミマシヨーツ」と声をかけ、昨日と同じ姿勢で入門嘆願（庭詰第二日）をする。もはや、取り次ぎの雲水は出て来ない。

今の時代にも、こんな浮き世離れした、禪僧を育てる実地教育が行なわれていることは、多くの人の知らないところである。

旦過詰

二日間の庭詰が終わった。

修行僧は第二の閑門ともいすべき旦過詰に入る。今では、庭詰と旦過詰で五日間であるが、昔は庭詰だけで五日間から一週間に及んだという。禪僧は誰でも彼でも、その若き日にこの閑門を経験しているのである。

旦過寮は薄暗い小さな部屋で、片隅に古ぼけた行灯が置かれているのが印象深い。



第一夜と違う点といえば、一枚の蒲団が置かれていて、この蒲団を二つ折りにして、その中に冷えきった体を横たえるのが許されることである。なんのことはない。柏餅のアンコみたいに身を縮めて、しばしのまどろみに入るのである。

旦過詰の三日間は、一種の幽閉生活で、骨の髓まで孤独を味わうことである。この部屋では終日、如法（法にかなう）に坐禪し、瞑想に耽るのだが、この間、女性的なやわらか味などは、かけらほどもない。その厳しさに郷里のやさしい肉親の温かさや、団らんの夕などをつぎつぎと思い起こさぬ者は少ないであろう。

今では庭詰や旦過詰は形式化されてはいるものの、科学的で知的な教育を受け、自由にのびのびと育つた新米の雲水の目には、僧堂とはなんと前近代的であり、聞きしにまさる異質な世界だと感じられるであろう。

けれども、そこでは高い真理を求める鉄の意志が育てられ、一生の間におとずれるさまぎまな苦悩に立ち向かう、すぐれた智慧が養われていくのである。

参堂入衆の前晩

庭詰、旦過詰。五日間の人物試験ともいるべき、僧堂掛搭のための懇願期間は緊張の連続であつた。五日目の晩に旦過寮の障子が静かに開いた。「こちらへ」と案内者に導かれて、彼は僧堂の取締役である知客つさんに面接する。

知客つさんは僧堂の統轄者で、副司（会計）の役も兼任している。三十がらみの古参雲水で、一癖も二癖もありそうなつら構え。洗いざらされた木綿衣の色もあせて、紺色だけが残つている。一見して久参底の御仁という風格がにじみ出ている。

彼の居室を副司寮ともいう。飾りけのない、さっぱりというよりも、むしろ殺風景な部屋である。敷居ぎわに座り、「お願ひします」と声をかければ、響きに応じるがごとく、「ハイツ」という返事が返つてくる。

障子を開けて、深々と一礼する。中を見ると、前に警策という四尺くらいの棒を置

き、提灯ていとうと称する手行灯てあんぢんに灯をともし、薄暗い中に座つてゐる。そこはかとなく威圧が感じられる。室に入つて、知客ちきくさんの前に座り、額を畳につけた姿勢でつぎの言葉を待つ。

「再三、貴士の掛搭かとうをお断りしたが、如法に庭詰にわづめなどを過ごよほうしたことでもあり、願心のほども知つた。よつて、明朝、參堂さんどう（雲水の仲間入り）を許す。受業寺じゅぎょうじの和尚さまからお閑をいただいて修行に來たのだから、道場の規矩きくを守り、専一に己事究明こじきゅうめい（真理をきわめること）に努力しないときは、即刻下山してもらう」

と、いちおうの訓戒と、大事了畢だいじりよう畢（己事究明）までは決して下山しないことを誓約させられて、引き下がる。今までの苦労を忘れ、ホツとする瞬間でもある。

新到參堂

辛抱の甲斐あつて、ようやく入衆にゅうしゆの朝がきて、彼は禪堂に移される。



禅堂には前門ぜんもんと後門ごもんの二つの出入り口がある。新到の僧は導かれて後門から入る。そして、堂内を一見し、思わず息をのむ。そこには、銅頭鉄額どうとうてつがくの先輩雲衲うんぬう（雲水）が、さながら山や巖のごとく突兀とつこつと坐っている。静寂の中に張りつめた雰囲気がみなぎっているのを感じる。

前門に首座しゅその直日じきじ（禅堂の取締役）がいて、禅堂内の指導と監督にあたり、後門には禅堂全体の管理者である侍者寮頭じしゃりょうとう（禅堂の世話役頭）が坐っている。彼らはともに久参きゅうさん（長く修行を積んだ人のこと。新参に対しても久参という）または飽參底ほうさんてい（奥義を体得して師の指導の必要のない人）の役位さんで、その物腰やつら構えからして尋常ではない。

まさに前門の虎、後門の狼というべき存在である。やがて彼らから選仏場せんぶつじょう（僧となるよう鍛練選出する場。転じて禅堂を指す）にふさわしい、手厳しい法愛の策励さくれい（はげまし）を受け、彼らに鬼の姿を見出すであろう。

前門を入ったところに聖僧さん（文殊菩薩）が安置されている。新到の僧は礼装の



袈裟を着け坐具をひろげて、懇懃に五体を投地して、修行成就の願をこめて礼拝をする。その後、初めて自席に案内される。そこには、貧しい彼の複子（荷物）がすでに置かれている。もちろん、最末单である。

着座と同時に「新到参堂！」という侍者寮の声を合図に、一斉に低頭する。引きつづいて渋茶がふるまわれる。これを茶礼といいう。

これで、めでたく入衆（雲水の仲間入り）したのだ。これほど爽やかで、簡潔な新入者の紹介も他では見られない。学歴も人柄も前歴も、いや名前すらも、ここでは紹介されない。「新到参堂——新しい修行者だよ」の一聲で終わるのである。「ようしく」ともいわない。まことに爽やかである。

相見

参堂を許されて半月にもなつたであろう。禅堂内の厳しい規矩（きく）にも少しは慣れたこ



ろ、知客寮から相見香の用意をするようにと伝えられる。相見香とは道場主である老師に初めてお目にかかるて、師弟の礼をとり、参禪入室（指導）の許しを乞うときの入門時の礼物のことである。

現在では若干の金子を白紙に包み、水引きをかけ、表に小さく自分の名前を、その下に筆太に九押と書くのだが、往昔は必ず香を包んだそうである。

相見の部屋では必ず一炷（一本、一片）の香が薰じられることは今も昔も変わらない。香がたかれるということは、この人をわが師として、生死の一大事を聞法し、永く師弟関係を結ぶという誓約であつて、禪門古来のたいせつな儀礼として、大きな意義をもつものである。お茶やお華やその他の芸事のお稽古の初めに、束脩と称する入門料を差し出すのとは白雲万里の違いである。

思えば苦しかった二日間の庭詰も、孤独で退屈な旦過の三日間も、不慣れな禪堂内の規矩になじむ努力もみんな、今日この師に会つて聞法するための辛抱にほかならぬい。願わくは師よ、われを引導し、安心させたまえ、とひそかに念じながら、前もつ



て教えられたごとく型どおりに、室の入口の敷居ぎわで坐具ざぐを展べて、三拝する。老師はそれに対して默然と合掌して応えられる。

つづいて出された茶をすすり終わると、初めて第一声が発せられて、姓名、受業寺じゅぎょうじ（得度して戒を受けた寺）、教育などについてたずねられる。

現在では、初心者に対し、このていどで簡単に終わってしまうが、古人は初相見時でも問題の核心にふれて商量しゃりょう（問答）されている。

「雲水二十、し師家四十」というが、禪の修行には相互間の年齢もまたいささか影響がある。今の僧堂修行は形骸化されたとか形式主義だとかいう声も聞かされるけれども、僧堂生活を体験するのに必須の条件は、やはり若さである。体力がなければ、その厳しさにはついていけない。

師家もまたこれら大勢の雲水を指導するにはそんとうな体力を要するばかりか、それにもまして大事なことは、修行者に対して「涓滴けんてき（ひとしづく）も施さない」という大慈悲心であり、親切心である。それにはやはり四十代、五十代の眞の盛りの師家

がよいと思う。師家も人間で、歳をとるにしたがい、人情に墮し、押したり引いたりして、つい手を貸す老婆心切になりがちになる。室内のことに関するかぎりは「両者は仇敵同士」とさえいわれるが、みずから努力で開悟せしめるための親切心を表現した言葉である。

初心者にとって、初めての相見の印象は脳裏に深く刻みこまれて、いつまでも忘れがたいものとなる。

老師。それは一見ラチもない田舎おやじみたいであり、ボロボロに刃のこぼれた大鉈なたのような感じがする。だが、そこに捨てがたい魅力を蔵しているのだ。俗っぽい表現だが、この田舎おやじに一目ぼれして、そこはかとなない信頼感さえ生じ、やがてトリモチに引っかかった小鳥のように手も脚も出ないようにされるのだから不思議である。

入室参禪

相見しようけんがすめば、早くもその日から入室参禪（老師の室で指導をうけること）が許される。

新到じんとうが、入室するとまず公案こうあん（修行のための問題）が与えられる。僧堂そうどうでは平常では朝暮二回の喚鐘かんしょうが出て、参禪が促される。喚鐘とは、参禪入室を知らせる合図のことである。老師の居間へ通じる渡り廊下などの場所で鳴らされるのだが、雲水たちはここを喚鐘かんしょう



場^ばと呼んでいる。

喚鐘の音を聞けば、雲水たちは一齊に喚鐘場に走つて順番をとる。やがて、自分の順番がくれば、この鐘をみずから二点打して老師の部屋に入るのだが、そこには一定した独參^{じくさん}の作法が定められていて。まず、室の入口で合掌礼拝する。

入口の畳は、永年にわたる入室参禅者の汗と手垢が浸みこんで、黒く光つていてなんとなくすさまじさを覚える。

僧堂では原則として、朝暮二回の入室を欠かすことは許されない。「朝参暮請^{しんぎょうさんぽう}」という言葉があるのは、この辺の



消息をいったものである。

室内では師家しけと学人がくにん（修行者）とは「差し」であり、余人を交えぬ法戦場ほつせんじょうである。学人は自己のかかえていたる公案の見解けんげを述べて、師家の判定を請うのだが、ここでは古参も新到も徹底的にその心根が鍊磨される。この修行のすさまじさは「炉鞴ろはいに入つて鉗鎚けんづいをうける」と表現される。あたかも吹毛すいもうの剣をつくるのに、生鐵さんてつを炉ろに投じ、その含む不純物を取り除いて純度百パーセントの鋼鉄にし、さらに大槌小槌で打つて鍛えて、強靭な素材を作り出すように、純粹な人間性を開眼せしめるのである。

師家は入室する修行者に公案を与えて修行させる。妙心寺のご開山さまは雲水に対して、

「本有田成仏なんとしてか迷倒めいとうの衆生となる——本来完成した仏であるというのになぜ迷つているのか」

と問いかけて公案とされたと伝えられている。



仏とは純化された人間の代名詞であることを確認し、禅の宗旨を体得するために、公案を縁とするのである。

公案は「悟り」という屋上に登るハシゴであり、手段でもある。もちろん登りつめれば降りて来なくてはならない。「上は菩提^{ぼだい}を求め、下は衆生を化す」である。

公案。それはまつたく常識を超えた難問ともいふべきものである。たとえば「隻手の音声^{おんじょう}を聞いてこい」などというのがある。両掌を拍つてこそ聞かれるのが声であり、隻手（片手）では常識では声にならない。

しかし、天地もはり裂けるほどの隻手の一声を、古人は聞いている。修行者の心が純化されたときに自得できる一声である。この一声が聞かれたときを「見性^{けんじょう}」といい、隻手音声の一則を見たともいう。「見」の一字は禪僧にとつて大きな意義をもつてゐる。

初関が透れば、つぎつぎと公案のハシゴを際限なく登る。雲水たちは「五十三次馬の屁の数」などと軽妙に表現しているが、どうしてどうして、馬の屁どころではない難透難解^{なんとうなんげ}（難しく透過し難い）である。

屁で思い出すのは、相国寺の独山老師であつたか、ある婦人の公案をいただきたいという希望に応えて、

「三三九度の盃の真つ最中に、花嫁さんがブウーッと出したら、居ならぶ皆さんに、なんと納得のいくご挨拶をするか」
という現成公案（ありのままの世界を問題として課すこと）を示されたという。

叢林——鬼と姫と

僧堂のことを正式には専門道場、また叢林ともいう。雲水たちは京都の僧堂を京叢林、地方の専門道場を江湖叢林といふ。江湖という呼称の由来は、遠く唐代に発し、江西、湖南など禪の盛んであつた地方の総称のことである。

林には多くの樹木が群れ立ち、幹が曲がつたり、不必要な枝の伸びたりする余地はない。木がただまつすぐに天に向かつて伸びていくように、大勢の修行者が一ヵ所に

安居あんごして、相互に切磋琢磨し、共通の悲願に向かつて、ただ薦直まくじき（まつしぐら）に進む状態を表現して叢林というのである。

叢林では今も仏陀の古制をそのままに、安居結制あんごけつせい（禁足して坐禅すること）される。前半年を雨安居うあんご、後半年を雪安居せつあんごという。

特に安居中のその前半の九十日間は、たとえ親や師匠の大事にあっても、簡単には暫暇ざんか（暇をとつて帰郷すること）は許されない。師親の死にあっても、一段と精彩せいさいをつけて参禪弁道（修行）することこそ、師親に対する報恩であると、健気にも非情な決意と心意氣を示した修行者もいる。

叢林ほど規矩きくずくめのところはないが、その規矩を体験実行することで禪僧としての人格が形成されてゆく。僧堂こそ真に宗門の最高の学府である。

峻厳な室内、厳正な規矩きく、つねに活気あふれる僧堂は鬼叢林おにそうりんと呼ばれるが、これとは反対の僧堂を姫叢林ひめそうりんとか茶屋叢林ちゃやそうりんなどと呼び、ズバリと蔑称していくおもしろい。開悟解脱かいごくげつだつの願心ももたず、いたずらに線香のとぼる数をかぞえるのは、さながら芸



妓や舞妓が玉（花代）を一本、二本と線香の燃える時間でかぞえる待合や料亭に似ていると揶揄したのであらう。

托鉢

禪堂生活の目的は、坐禅と入室の繰り返しによつて、無始劫來（はかり知れない遠い昔から）の煩惱妄想の皮を一枚ずつはぎとることである。はいで、はいで、はぎ尽くして、自己本来の純粹性にめざめることで



あり、そうして坐禅蒲団の上で死にきる公案三昧の体験である。

中国の詩人たちは馬上、廁上、枕上を三上といつたが、寝ても覚めても、いても立つても、いつでもどこでも句を鍊るのである。これを禪門では正念相続「じょうねんおうぞく」とか、動中の工夫とかいう。「動中の工夫は静中の工夫にまさること幾千倍」というが、この動中の工夫のひとつに托鉢がある。

托鉢は禪堂経済を維持する主たる方法ではあるが、単なる経済的目的だけでするのではない。施主せしゅに与え



る精神作用と社会的意義、そして、動中の工夫によつて純一無雜の境地に至る自利的因素はともに見逃せない。

托鉢のことを分衛ぶんねいともいう。多くの場合、三、四人の組に別れて、「ホオーツ、ホオーツ」と叫びつつ、一定の間隔を保ちながら街をおもむろに歩いてゆく。

けれども、新参の雲水にはこの「ホオーツ」の一声がなかなか出しにくい。古参の引き手さん（引率者）から「声が小さい、東に向かつたら叢山に、西に向かつたら愛宕山の頂に届くような声を出せ」と気合いを入れられたことも今は懐かしい。



紺の衣に白地の脚絆

ホオーホオーモ粹なもの

と京童は歌う。

托鉢中も工夫三昧である。牛の鼻づらに突き当たり、驚いたのは牛のほうで、ボヤボヤするなこの奴とばかりに角に引っかけられ、投げ飛ばされたとたんに大悟徹底、漆桶打破（うるし入りの桶を打ち破るように、迷妄を打ち破つて大悟する）した古徳の因縁（言行）もある。

僧堂によつて多少の相違はあるが、毎月二、七、五、十の日の午前中が托鉢日である。

僧堂ではいろいろな托鉢をする。茶鉢、麦



鉢、大根鉢、野菜鉢などが季節に応じて隨時行なわれる。また、各僧堂には特定の供養くよう主しゅがあつて、月々に米や金などを寄進する。その供養を受けるために雲水たちは出かけて行くが、これを日供にづくとか合米ごうまいと呼ぶ。

ひとりでおよそ二十軒ばかりの施主の家を回るのだが、集め終わると一斗ちかい量になる。雲水たちは首にかけた重い袋の目方に耐えて数里の道を徒步で帰つてくる。特に風雪の日の日供集めはたいへんな労働であり、ときには施主家の飼犬に吠えられて噛みつかれたり、手痛い挨拶を受ける。

ところで、古来、禪僧と犬とのかかわりや逸話は多い。

「無」の公案は、「狗子に仏性有りやまた無しや」という一僧の問い合わせに対して、趙州和尚が与えた答えであるが、この公案の犬はすべての禪僧の骨の髓まで食らいついて離さない。托鉢中も「有無を超えた無」の公案になりきるのが施主の供養に応える唯一の道でもある。

王常侍おうじょうしという居士こじ(深く仏法を信奉する男)が、

「一切衆生には仏性があると聞くがいかがですか」

と一僧に問いかけた。僧は答えて、

「あります」

と。この答えがいまだ終わらぬうちに、王常侍は襖に描かれた^{いぬ}狗子の絵を指して、
「こいつはどうか」

僧は無語で、返事につまつた。王常侍はすかさず、

「そらつ、犬に噛まれるぞ」

と、僧に代って答えている。

また、日供に出て犬に噛まれた僧に向かつて、

「金翅鳥^(きんしのじょう)（龍を常食とする空想上の猛鳥）は大千世界をひと呑みにするほどだが、一片の法衣の布をかけていると、あえて呑まぬという。しかるに、貴僧は全身に法衣を着けているのに、犬に噛まれるとは、いつたいどうしたことか」と施主が問うた例話もある。油断のならない現成公案^(げんじょうこうあん)である。

提唱ていしょう

一、六、三、八の日は提唱、すなわち講座日である。この日は心ある外部の者にも聽講が許されることがある。

僧堂では、何もかも合図はみな「鳴りもの」による。定刻に禪堂の前門に掲げられている板木はんぎが打ち鳴らされると、大衆だいしゅう（雲水）は袈裟けさをつけて威儀ゐぎを改め、つぎの合図の鳴りものを待つ。やがて樹間の空氣を震わせて法雷のごとく法鼓ほつか（太鼓）が響くと、堂内取締



役の直日は引磬（かね）を打つて大衆の出頭を促す。大衆は静かに単（自分の坐位）を降り、講本を捧げて本堂に入る。本堂に着座し終わるころ、道場主である老師が知客（しやくさ）さんに先導され、侍者を伴つて現われる。

開山、歴代、講本著者の順に、短いお経が一巻ずつ三回読まれるが、老師はそのつど香を献じて礼拝される。づいて老師は講座台に上つて本尊に正面して坐る。そのころには大衆は開山大師の遺誠（ゆいせい）を読んでいる。

提唱されるにふさわしい雰囲気と、

玉



聴講者の心の準備がしだいに醸成されて、提唱は始められる。提唱とは「ブラさげて見せる」という意味である。決して単なる説明ではない。だから、教科書の講義を聞くような知性や常識では、理解が困難である。講本の文字文章や老師の言葉の内面的な含蓄を味得し、ウーンと合点できるようになれば雲水も一人前である。

頻に小玉と喚べども元これ無事、檀郎が声を認得せんことを要す

という禅語がある。恋しいと思う男性に、自分の所在を知つてもらいたいので、用事もないのにしきりに召使いの名を呼びつづける女心にも似ているのが提唱の味であろう。

四九日

四九日とは、四と九のつく日のことである。この日は内外の大掃除、開浴（入浴）、剃髪（髪を剃る）することになつており、五日に一回の割りで回つてくる。これを雲



水たちは四九日と呼んでいる。

広い境内掃除や諸堂の清掃が堂内（禪堂）、常住（寺務所）とも持ち場にしたがって行なわれる。

浴頭（風呂焚き当番）は新旧二人の僧が一組になつてこれに当たる。新到の僧は浴頭さんの指揮にしたがつて風呂焚きや開浴に必要な準備をする。

「薪はどこにあるか」

と聞く新到僧に向かつて、

「薪なしで沸かせ」

などと、引き手さんの厳しい答えがはね返る。

剃髪は隣単（隣りの席）同士で剃り合うのだが、新米僧にとつてこれは大事業である。扱い慣れない剃刀、ときには頭の皮をはがれることも珍しくはない。剃り上がつた青い頭のそこかしこに、止血のタモトクソが張られているのも四九日の風景である。旧い雲水たちは器用に剃刀を使いこなし、頭の二つや三つはアツという間に剃り上げ

てしまうのだが、初めての者にはそうはいかない。相手がコンニヤク頭で毛が剛いとなれば、剃る方も剃られる方も泣き出したくなるほどである。

禅家では入浴のことを開浴といふ。風呂が沸くと、浴頭はまず隠寮(いんりょう)（老師の居室）に出向いて老師に開浴をすすめる。老師の開浴後に、鳴りものを鳴らして、開浴を堂内(どう)（禅堂）に報ずる。すると高單(こうたん)と末單(まつたん)からおのの二、三名ずつ、一組となつて入浴する。まず、脱衣場に祀られている菩薩に礼拝してから入る。開浴中に浴頭が入浴者の背を洗い流し、肩や首筋の按摩もしてくれる。浴頭は身体の汚穢とともに、入浴者の心の汚穢までも洗い去る意気ごみで奉仕するのである。

把針灸治(はしんきゅうじ)

把針灸治はおおむね月末の大四九(おおよし)（十四日と晦日のこと）の午後が当てられる。この日は雲水たちの休養日であり、近づく大接心(おおせっしん)（日限を定めての坐禅三昧）のための

心の準備と身体の調整日もある。息つくいとまのない僧堂生活から解放される半日である。

平素は許されない弁事(べんじ)（外出）も薬石(やくせき)（夕食）までのあいだ許される。また、衣類の洗濯や縫い、脚腰の痛みの治療に按摩をしあつたり、灸点をして不調な体の治療をしたりする。針を把(と)り、灸をすべて身辺整理をする日という意味である。

僧堂という集団生活では、他人に迷惑をかけないことも陰徳(いんとく)とされている。汗臭い衣類などを着て鞞撻(ひんしゆく)を買つたり



しないこと、病気になつて他の者に心配をかけないことは僧堂生活では必須の心得である。二、三年も僧堂生活を経た雲水は灸点のツボも心得ているし、按摩も実に上手である。針仕事なども驚くほど器用にやってのける。

飯焼き、料理、大工仕事に左官、農作業から篠づくりなどなど、まことに雲水は万能選手である。彼らに不可能なことといえば、子供を産むことくらいである、と評した人もいる。黒い破れ衣に、あり合わせの白い布をついで、見えるところに墨を塗つて、「でき上が



り」などと得意になる者もいる。ほほえましい把針灸治である。

しかし、この日を過ぎると、日ならずして大接心がおとずれる。自然に雲水達の顔は引き締まる。手放しでこの休養日をよろこんではいられない。

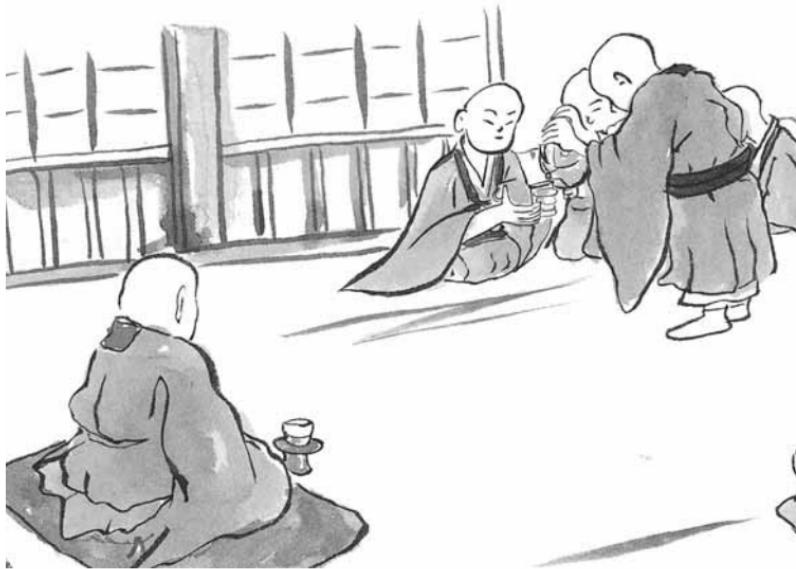
接心——その前夜

五月一日は雨安居（夏、一ヵ所に集合、禁足しての修行）の入制（シーズン入り）である。この日から七月末日までは禁足安居して坐禅と入室参禅に



明け暮れる。この九十日の間に、入制、
半夏はんげ、夏末けまつの大接心、そして、その前夜に「地どり」「ねり返し」などといわれる接心を繰り返す。一夏九十日は接心、接心の連続である。

接心とは摂心とも書かれるが、心の散逸を防ぎ、公案に全神経を集中して坐りぬくことである。そこに自然に禅定力が養われ、本来の自己、自他平等で欠くことのない仏心を自覚する。接心ともなればつねにも増して、大勇猛だいゆうみょう心しん、大願心だいがんじんを奮い起こすのはもちろんだが、他動的な力も大いに加えられる。



みなの修行成就を願う老師や旧参の役位によつて、非情で手荒な策勵が加えられるが、これもみな親切以外の何ものでもない。

明日からの大接心を控えて、その前夜には総茶礼(そうざれい)が行なわれる。茶礼は僧堂の諸行事にさきだつて必ず行なわれる儀式である。入制総茶礼ともなれば、一段と緊迫の度が加わり、緊張のひとときである。やがてくる嵐の前ぶれのような静かな緊張が僧堂にみなぎる。

夕方の開板(かいはん)（合図のために板を打つ）が全山の空氣を震わせて響き終わる。それと同時に常住(じょうじゆ)（庫裏(くり)）から茶礼の合図の柝(たく)（拍子木）が五声打たれると、雲水たちは無言で足袋を着け威儀を改め、茶礼茶碗をめいめい袂にして、出頭の柝が大声小声交互に打たれるなかを本堂に向かう。一同が本堂に着座し終わったころ、提灯(ていとう)（持ち運びのできる行灯(あんどん)）を持つ知客(しやく)に先導されて、老師が静かに正面の毛氈(もうせん)が敷かれた席に着座する。それと同時に、一つの薬罐(やかん)の茶がつぎつぎにつがれていく。一同は黙つて、しかもそろつて一礼して茶を飲み終わる。そして、「ハイツ」というハリのある老師の

一声で全員は平伏し、つぎの言葉を待つのである。

茶礼は禅堂生活の根底を流れる平民的平等観の表現である。かつての軍隊式のぎこちなさや階級的峻厳さとは大いに趣を異にしている。

茶礼には必ず老師の垂誠がある。垂誠とは、禅に参する者の心構えや、古徳の行状などを簡単に語り、つねに新鮮な気をもつて参禅弁道に努力するよう激励を与えることである。

一場の垂誠が終わり、ひきつづいて亀鑑きかんが読まれる。亀鑑とは手本、のりというほどの意味である。僧堂によつてその文章に多少の相違はあるが、ともに参禅弁道を第一の公務としている。古徳が身命を惜しまずに行はれた例話も記されていて、おのが頭ずねん燃を救う（頭の火を消す）がごとき思いで刻苦勉励、転迷開悟に骨折れ、と綴られている。その巻頭には、

禪門の徒、古則に參するは吾宗第一の公務なり云々
または、

往昔（むかし）慈明（じみょう）、汾陽（ふんよう）に在りし時、大愚（だいぐ）、瑣瑣（ざざく）等と伴を結んで参究す。河東（かとう）苦寒（くさん）なり、衆人（しゆじん）これを憚（はばか）る

などとある。みずから股（き）に錐（さや）をさして睡魔（すゐま）と鬪（たたか）つた慈明和尚の逸話（いつわ）なども記されていて、どの龜鑑（くいかん）とも末尾（まつび）は、

勅施（べんせん）、勅施（これをつとめよ、これをつとめよ）

と励ます言葉で結ばれている。

このあと堂内（どうない）では日常規則（じょうじゆきそく）、延寿堂規則（えんじゅどう）、入浴規則（りゆくきそく）が、また僧堂（そうどう）の運営面（うんえいめん）を担当する常住（じょうじゆ）という役職（えきしょく）には常住規則（じょうじゆきそく）、旦過寮（たんがりょう）規則等々（とうとう）が古参（こさん）の役位（えきい）によって読まれる。僧堂（そうどう）とはまことに規則（きそく）づくめなどころだというのが、新到僧（しんとうそう）の感想（かんそう）であろうか。

総 参

本分強調（おおぜつしん）週間（しづかん）の大接心（だいせつしん）になると、通常（じょうじょう）は朝暮（あさはら）二回（ふたかい）の独參（どくさん）も回数（かいすう）を増して四回（よんかい）以上（じょうじょう）に

なる。この他にも前後三回の総参が設けられている。総参は独参とは異なり、見解の有無にかかわりなく、ひとりとして入室^{にゅうしつ}を避けることは許されない。

入室参禅は、自己の所見（見解ともいう）を呈して師家の検閱を仰ぐことである。参禅しなければ坐禅は実を結ばないし、進歩もない。しかし、確信のないあやふやな見解では、隠寮^{いんりょう}の敷居が高くて師家の前に出られない。師家は、いいかげんな見解をいち早く見抜いて、追い出しの合図の鈴を鳴らして相手にしない。場合によつては策^{さく}励^{れい}のための嘲笑、悪罵が浴びせられる。音高く一掌（ビンタ）をみまわれ、順番を待^まつ喚鐘場^{かんしょうば}までパチンという音が聞こえることも珍しくない。

このように偏見に囚われていて、一向に進歩の見えない者や、知的分別で見解を呈する者に対しても、手厳しい痛棒をふるつて室外に追いたてる。さながら流血の修羅場と化すこともあつて、室内は総参、独参を問わず両者の命かけての法戦場^{ほせんじょう}でもある。

総参の合図は初日、中日、終わりの三回である。知客^{ししゃく}さんが喚鐘を打つて入室を促す。入室の前者と後者はちょうど隠寮の廊下で出会うようになる。

室に入る前に礼拝してから師家と対座し、まず名を名のり、所持の公案を唱えれば、老師はうずくまる獅子のごとく静かに坐つて法戦のときを待つてゐる。

慈悲行

室内で老師と雲水が厳しいやりとりに火花を散らしているころ、ここ堂内はいつもの静けさから一転して修羅場となる。

直日、侍者、助警などの古参の堂内



役位は、心境が開けず、とても入室できないでいる者を参禪にかりたてて、動かなければ腕力に訴えて引きずり出しにかかるのである。

小さな体の直日と巨漢の新到とのとつくみ合い。柱や障子、または單欅など、すがりつけるものには、なんにでもすがりついて動くまいとする新到。その手や脚を引っぱがして二、三人がかりで情け容赦なく、しゃにむに運び出し、強引に喚鐘場へ送りこむ。非情な親切に衣は破れ、唇が切れ、鼻血が出る。ときには組み



打つて禪堂の外の溝へ転落、氣絶し、息を吹き返したそのとたん、冷え切つた死灰の中から豆がはじき出たように、痛快な悟境に至つた先徳もあつたという。

こんな古参者の手荒な行為を「ご案内」という。僧堂生活の辛く苦しい経験である。経験豊かな先達ともなれば、ニッヂもサツチもゆかず、ぬきさしならない手づまりの見解にたち至つてゐる後輩を静かに観察して、機が熟するとみてとれば、活路を切り開かせ、突破口を見つけさせるのに非情な活手段を用いるのである。

この意味で「ご案内」はまさに没慈悲の大慈悲行であろう。

作務さむ

七日間にわたる大接心おおせつしんも終わつた。真仏の所在を体得実証、見性けんじょうして莞爾かんじ（ニッコリ）とした相好を示す者、人一倍の努力の甲斐もなく無所得に長嘆息する者などさまさまである。けれども、そのいづれも「禪は講ずべからず、參ずべし」という祖師の



言葉の嘘でなかつたことを知つたことであろう。接心中は、毎日老師の講座に列して提唱を聞いたが、提唱は点描にすぎず、第一義そのものでも悟りの当体でもないことを知つたことは、無所得の所得というべきだろう。

この七日間の接心のため、僧堂では内外のいろいろな作業がストップしていた。接心明けからふたたび正常にもどる。いろいろな肉体的勤労が山積している。この労働のことを作務^{さむ}という。作務は禅的生活の本質



的な特長でもある。作務は坐禅止静で得たものを実生活の場に適応させる機会であり、労働のための労働ではない。

園頭作務は農園で鍬をふるい、肥

桶をかつぎ、必要な野菜づくりをする。

土木作務ではツルハシをとり、

モツコかつぎに肩をはらし、山作務

となれば斧をふるつて薪づくり、草

刈の作務など、自分たちができる可

能なかぎりは他人の手は借りない自

給自足である。ときには全員で、と

きには分業で、大和尚から小僧さん



まで、新到も古参も共同の目的に向かつて力を出し合うのである。そこには差別も階級もなく、混然一体となつて汗を流し、「一日作さざれば、一日食らわづ」と、禅堂制度の創始者である百丈懷海禪師の清規（規則）の精神が今も脈々と伝えられている。

坐禅といい、作務といい、禅では野外と屋内の動静の二途にわたることを極端にきらう。いつでも、どこでも全身で「禅を生活する」。まさに動静一如の心理的姿勢をもちつづけるのである。

先哲古聖が作務に従事しながら來訪者と厳しい問答をした例は多い。唐代の祖師、南泉和尚は、「如何なるか南泉の道」という來訪者の問いに、「この鎌は三十円で買ったが、よう切れるわい」

と答えている。まさに一刀両断、目のさめるような切れ味を示している。老南泉はまさに草刈作務の名人である。こんなすごい切れ味の心鎌を手に入れて雑草を刈りとつた僧は南泉以後、はたして何人であろうか。

また、掃除作務をしている趙州和尚に一僧が問う。

「大和尚のような善知識にもやはり塵があるのか」

趙州は即座に答えて、

「それまた一つ飛んできた」

と、洒落に応じているが、問僧ははたして合点できたであろうか。読者のみなさんもこの公案に参じてみていただきたい。これらはいずれも、作務中といえども坐禅をしている、動静一如の心地に遊ぶ古徳の姿である。

このような叢林の基礎を定め、固められたのは唐代の祖師百丈禪師で、その宗典を『百丈清規』^{ひやくようしんぎ}という。『百丈清規』はひとり叢林ばかりでなく、小笠原流の礼儀作法や茶道の源流などもいわれている。禪師は八十歳をすぎても決して休まず普請^{ふしん}に出られたという。老齢を気づかつた弟子たちが禪師の作務道具をかくしたところ、「働かせてもらえないなら」と、食事をとられなかつたというエピソードはあまりにも有名である。

放参日——休日
ほうさんび

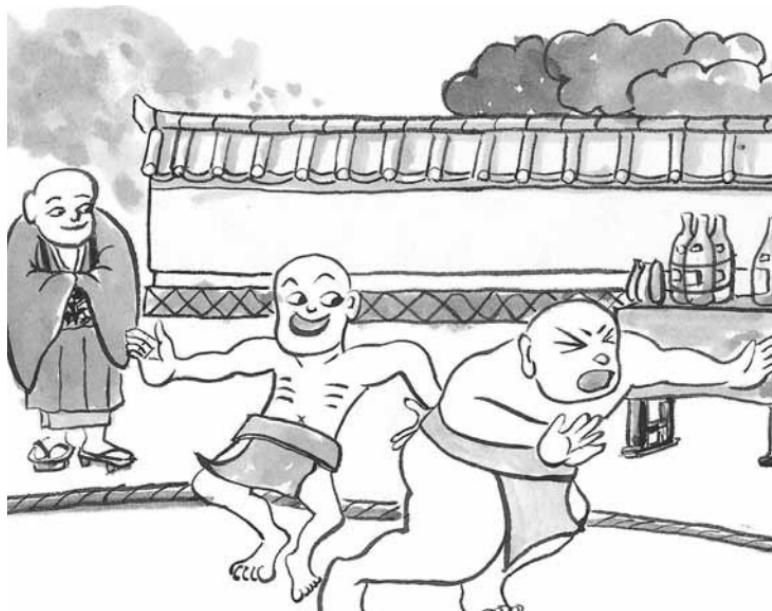
修行に明け暮れる雲水たちにも、もつとも楽しく、くつろげる一日がある。除策^{じよさく}または随意坐^{すいいざ}という特別な休日である。日ごろの緊張や制約から解放され、意のままにふるまうことのできる放参日は、まさに春風駘蕩^{しゆんぷうたいたいとう}の一日である。

三仏忌^{さんぶつき}（お釈迦さまの降誕会^{こうたんえ}）など日の日で、この日は規矩^{きく}の象徴である、あの警^{けい}



策もはずされる。国の祝日も随意坐となるのが通例で、これらの日には篤信の施主からの供養もあつて、平素の主食とはうつて変わつたご馳走ずくめになる。これを展てん待たいとか饗応きょうおうといふ。粥座しゆくざ、齋座さいざ、薬石やくせきと呼ばれる朝日晚の三食ともご馳走の日は終日饗応といふ。

ひさびさのご馳走を十二分に頂戴し、古参、新到入り混つて、碁や将棋にわれを忘れる者、寝つころがつてひさびさに真昼の天井を眺める者、市街に弁事べんじ（外出）す



る者など、除策日の一日は放参三昧である。りっぱな相撲場があつて、いまも相撲試合を催しているところもある。

放参日で印象深いのは、やはり冬至冬夜（十二月二十二日）である。陰が極まり一陽來復を祝うのだが、この日はまったく底抜けの無礼講である。信者や居士（一般的の参禪者）を招いて、薬水（酒）もふるまわれ、盛んな宴が催される。

飲むほどに酔うほどに、お国自慢の歌も出て、日ごろは苦虫をかみつぶしたみたいな役位（役付）さんも手拍子を打つたり、隠し芸も出したり、にぎやかな僧堂のコンパ風景である。老師がくつろいだ姿で席につらなつて、弟子たちとともにひとときの歎を尽くされるのもこの日だけである。

点心

僧堂の家常飯（平常の食事）は、麦めしに臭い万年漬、そして一食だけに添えられ



る味噌汁だけである。それなのに、多くの雲水は血色もいいし、まるまると太つているのは不思議であり奇妙でもある。その秘密、それは点心である。

点心といえば中国ではお菓子のことである。本来の意味は「ちょっとした腹ごしらえ」とか、「おやつ」というていどの意味であるが、雲水がいうところの点心はその内容を大いに異にしている。胃袋からノドまでつめ込み、ふだんの栄養不足を補い、満腹感と充実感に莞爾とするのが点心風景である。見ようによつては「お齋じやくにあつた餓鬼みたい」という言葉のそれである。

施主家の玄関で帰り仕度の草鞋の紐を結ぶのに、腹がいっぱいで苦しかった覚えがあるのも私ひとりではないだろう。

秋あき点心てんじん むかし話の 食太し（日多義恭句集『無眼子』より）

粗食の雲水生活で栄養失調にもならず修行できたのは、点心さきと呼ばれる篤信の人びとの供養の外護げごのおかげにほかならない。

このように修行者のために喜んで供養して下さる多くの信者さきが僧堂にはある。

点心はあらかじめお願ひしておき、多くの場合は托鉢後に三、四人が出向いて頂戴する。施主家のお仏壇に向かつて、まずねんごろな読経回向をしてから別室の膳に向かう。ここでも僧堂での斎座（中食）同様、食前の経が唱えられ、生飯と称して七粒ほどの飯を右手の母指と中指のさきでつまみ、左手の掌の上で空じて、鬼神、餓鬼に供える。たいせつな禅家の食事作法である。

出されたご馳走は一物も残さないのはもちろん、皿、小鉢まできれいに湯茶ですすぎ、舐めたみたいにきれいにして、おののに積み重ね、食後の偈を誦む。さわやかな点心風景は「サッパリして夕立と禪坊さんの点心あとみたい」などと評されている。点心にまつわる先徳、古人の話題も少なくない。

点心を求めた徳山和尚に、茶店の婆子ぼすは、

「お經では、過去心不可得、現在心も不可得、未來心もまた不可得というが、ご坊はどうの心に点ずるのか」

と切り込んでいる。荒馬をみごとに御してきたさすがの徳山も、思いもかけぬ伏兵に

あつた。茶店の前で老いた驢馬に蹴飛ばされたみたいで、点心どころではなかつたであろう。

常住——じょうじゅ 隠侍いんじさん

僧堂の構成は堂内どうないと常住じょうじゅから成り立つ。堂内は禅堂、常住とは寺務所である。

毎年二月と八月の解制かいせい時にそれぞ役を交代する。在錫ざいせき（修行）一年以上の者のうちから、評席ひやうせき（古参の雲水）たちの合議によつて人選さ



れる。大衆だいしゅの多い僧堂にあつては、二、三年ていどの在錫では、常住体験を経ない者もあるが、五、六年も在錫すると常住をひとつおり経験する。人選は適材適所主義で、なかには万年殿司でんす（仏殿を司る係）などといわれて、知隨寮に入り、法務や仏殿奉仕をいくまわりも体験する者もある。

僧堂の管理支配は久参きゅうさんの雲水に任せられ、紀綱きこうを司る知客寮と經理会計を司る副司ふくしは多くの場合兼務となり、涉外、經理、紀綱、企画など僧堂全般の運営を掌握する。知隨、副隨、隱侍



(各二名) は、おののおの副司の指揮を受けて寺務にあたる。

隠侍は老師の侍者として、老師の身のまわり一切の世話はもちろんのこと、相見者じょうけんしゃ（訪問者）の接待、外出時の伴僧ばんそう（おとも）などの女房役をつとめる。老師の咳ばらいひとつに、何を要求されているかを察知するまでにならなくては隠侍はつとまらない。
「衲なが病氣したら棺桶をつくるだろう」

などと、冷やかされるまでになり、老師の手足のようになるには、なかなか年季がいれる。老師はその居室である隱寮から侍者ひんりょうを呼ぶのに、合図の馬鈴ナガを使われる。この合図の馬鈴の音で、二人の隠侍のどちらをお呼びであるかを判断するにはそういうの経験がいる。チリンと馬鈴一声、ハイツと返事よりもさきに立ち上がる。まさに啐啄そつたくの気合である。

ひとつの要件が終わって、自室の敷居をまたがぬうちにつぎの一声で、またまた隱寮に引き返すと「ソコの本を取つてくれ」などといわれる。少し手を延ばせば自分で取れるのに、と思うと心中おだやかでなく、いつしか足音も強く自室にもどるや、ま

たチリンである。

つぎつぎに用を命じる老師だ、一度に要件をまとめていえばいいのに、小うるさく呼びつける、いまいましいおやじだ、と思いながら隱侍寮にもどつてくると、古参の寮頭りょうとう引き手さんがニヤリと笑つて、

「だいぶんご多忙のようで……」

などと涼しい顔で人をおちよくるばかりか、老師の下着の洗濯をしろ、夜具を陽にあてろ、風呂を沸かせ、薬石やくせき（夕食）の準備をしろ、と自分は座つていて他人をアゴで使うつら憎さ。まさに踏んだり蹴つたりである。

坐禅工夫どころではないが、疲れた体に鞭打つて夜坐やざからもどると、先輩はひそかに熱い甘酒を沸かしてふるまつてくれる。この男、親切なのか不親切なのかはなはだ疑問に思うくらいである。

枕をならべた新米隱侍いんじに対して、ボソリともらす引き手さんの一言は、「自我のあるうちは、ホンモノの隠侍にはなれないよ」

なるほど、老師が厳しく激しく新米隠侍を使うのは、私の自我やわがままを叩き崩してやろうという大慈悲心であったのかと、こんなよい修行の場を与えられていたのに気がつかなかつたおのれの不明を愧じ入るばかり。そう心機一転するとき、ホンモノの隠侍ができ上がってゆく。「釘とぬき、楔とぬく」という禅語を体験をとおして知るのも隠侍さんの法悦である。

常住——
典座さん

炊事係とか飯焼きという言葉には、どこか軽蔑的な、または自嘲的な響きがある。しかし、僧堂の炊事係は典座さんと呼ばれ、叢林そうりんでは、古来から重要なポストとされている。いうところの単なる飯焼きではない。

典座寮は修行者たちが陰徳を積む絶好の機会が与えられる場所で、そうとう修行の進んだ雲水の持ち場であるとされている。陰徳という言葉は禅家の慣用語で、僧堂で

は「不陰徳をするな」と厳しく躾しつけられる。「右手のなすこと左手に知らすな」というアレが陰徳である。

目立つことなく、きわだたず、与えられた仕事はいうまでもなく、他人の嫌がる仕事を人知れず、しかも、なんらの報酬も求めず実行し、他の修行者の修行成就のためにと奉仕することを陰徳という。仏教が標榜する自覚覚他覚行円満することである。

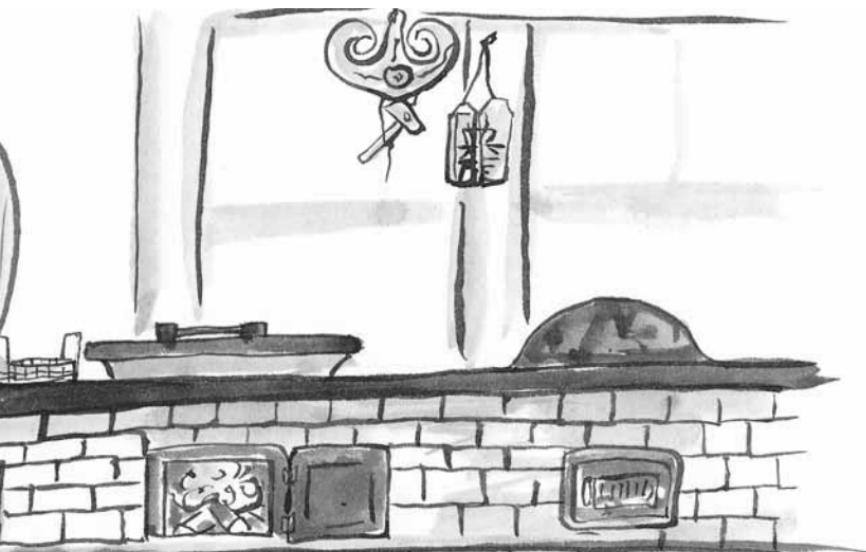
あらゆる行為に報酬を求め、見返りを期待したら、それは取引きであって、奉仕でも、陰徳でもなく、功德にもならない。

典座さんはつねに大衆の健康保持と修行の成就を願つて、親切、忍辱、感謝、没我を信条に、ひたすら黙々と奉仕し、与えられた材料を「活かして使う」ことに心をくだくのである。

いうまでもなく枯淡な僧堂の食事は、世の美食家から見れば実に取るに足らないものであるが、典座さんの親切心という不可欠な無形の調味料は、すべての素材を活きかえらせる。典座さんこそ調理の器量人である。

「活かす」とは、人工物と自然物とを問うことなく、「モノをしてモノたらしめる」ことであり、モノの持つ効力を最大程度に發揮せしめることである。それにつけでも、半杓の水を流れに返した古徳の敬虔な行為を、さすがはと感じ入るばかりである。

「細行をつつしみ大徳を成すべし」と常住規則には示されている。僧堂の流しの下に雀は来ないといわれるが、米の一粒も落とさないのが典座さんの心意氣である。おつかく越格な旧参底の寮頭さんと二人の雲水の三名が典座構成人員であるが、寮



頭さんは、ふだんは手を出さず物品の管理や事務面を受け持ち、炊事仕事は二名の雲水（寮頭に対し寮子という）が交代の当番制である。

非番の僧は作務^(さむ)、托鉢^(たくはつ)、朝暮の勤行出頭など堂内大衆と一様である。当番ともなれば堂内の閑静^(かいじょう)（起床）前に起きて、粥座^(しゆくざ)（朝食）の準備をする。五、六十名の大衆の食事の準備をりつぱにこなすばかりか、竈^(かまど)の前で燃えさかる火に目を輝かせて、釜から湯気の立ち上がるまで坐禅工夫する年季の入った達人もいるが、初めて典座を経験する者には泣き出した



いほどの忙しさで、鍋、釜にふり回されてのテンテコマイである。

こんな状態を見ながら、手を借さないばかりか、「だいぶ忙しそうですナー」と涼しい顔をしている先輩たち。決して意地悪や憎まれ口を叩いているのではない。これも、一人前の典座さん^{てんざさん}に仕上げる^{しつけ}躰であり、大きな親切である。そこには、もっと手順を考えろという僧堂一流の人づくり方式がある。

じょうじゅ
常住——ふすい
副隨と殿司さん
でんす

ぼくせき
墨蹟を依頼されると、好んで「常行一直心」とお書きになられた老師さまがいた。常に「一直心を行ずる、起居動作、いつでも、どこでも、何をするにも三昧の境地をもちつづける」ということで、「正念相続」ともいう。

たくはつ
托鉢の途中で、重荷の車のあと押しをした雲水に追放を命じた古徳があつた。恐る恐るその理由をうかがうと、「雲水ともあろうものが荷車などに気をひかれて、雁行^{がんこう}

(空飛ぶ雁のように列をなして歩くこと)を乱し列から離れるような不心得では修行の資格がない。早々に下山させろ」

といわれたと聞いている。忙しいなかにいてもつねに純一無難であり、寸分のスキもあつてはならないのが僧堂の常住である。したがつて、常住には「雜務」はないといわれているのもうなずける。

副司さんふうすの助役として、金錢出納、大衆だいしゆの展待てんたい（ご馳走）の献立と調理などのほか、
分衛ぶんゑい
(托鉢)たくはつの地域、人員割などは副隨ふすいの受け持ちとしている僧堂が多い。

そのほか齋会（祖師の年回法要）や各種行事に伴う設斎（來賓に膳を出す）の場合の献立、買い出し、料理などはみな副隨さんがとりしきる。人によつては本職ハダシの精進料理の名コソクばかりの腕前の持ち主もいて、愛用の包丁まで持参しているから驚きである。菜つ葉なつばひとつきれ、大根や芋の切れはしも決して粗末にはしない。国清汁とか建長汁などは一般家庭でも作られ、その名が知られているが、これらは禪寺の枯淡な、そして廃物利用の料理だと聞く。

「渓流に流菜を拾う」などと、一片の菜つ葉に対する修行者の心意気は画題にもなっている。名だたる道者を法友とともに訪ねて渓流ぞいの道をたどる途中、たまたま渓流に菜つ葉の流れてくるのを見た行脚^{あんぎや}の僧は、その法友に語る。

「この道者を訪ねることはやめよう。貴重な菜つ葉を流してかえりみないような道者はタカの知れたものだ。道者としての価値もない」

と帰りかけたとき、はたして上流から長いカギ竿を抱えて流菜を追つて来る



者があつた。それが、訪ねるその人であつたという禅話が今に伝えられる。一紙半錢たりとも粗略に扱わないので僧堂の家風であり、副隨さんである。

常住にはまた殿司寮がある。仏殿（本堂）係として「常に在すが如く」に仏祖に奉仕する法務係である。われわれが僧堂を訪ねると「ドオーレー」と、サビのある一声で身のひきしまる厳肅な気持ちにしてくれるのも殿司さんである。

大鐘、殿鐘、法鼓（太太鼓）など、



おおかたの鳴りものは殿司寮の所管である。その扱いは慎重で、鳴りもので僧堂の規矩^{きく}の弛緩がわかるとまでいわれるので、殿司さんは、その一撞^{いつとう}一打^{いちだ}にも心し、油断もスキもできない。

夜坐^{やざ}

時代の趨勢^{しゆせい}とはいながら、禅の大衆化という名のもとに、禅家がみずからの手で、その伝統の形を崩していいる現状である。抹茶をストローで吸うような禅の大衆化はいただけない。しかし、こんな時代にも世俗との一切の妥協をこばみ、いわゆる大衆化の門戸^{とぐ}をかたくなに鎖しつづけて、祖師の遺誠^{ゆいせい}を墨守しつづけているところがあるとすれば、それが専門道場であり僧堂である。

僧堂は叢林^{そうりん}ともいい、群生した樹木がたがいに切磋琢磨^{せつさたくま}しあつて純粹に育つところである。この意味からすると、ズル和合になりがちな少人数の僧堂からは、世の蔭涼^{いんりょう}と



なるような大樹は育ちにくい。

就寝のことを僧堂では解定^{かいぢん}という。解定前には必ず短い経または陀羅尼^{だらに}あるいは先徳の座右の銘などが読まれる。そして、大衆^{だいしゅ}が一枚のかしわ蒲団にすばやくくるまるのを待つて、直日^{じきじつ}が警策^{けいさく}を持ち検單^{けんたん}（点検）のため堂内を一巡し終ると、直ちに消灯。雲水たちは、ねまきもパジャマも着用しない。衣を脱ぐと、着物を着たままの姿で床に入る。

そんな解定風景を、なるほどとうなづけるのはしばらくしてからのことである。雲水たちは、やがて静かに蒲団から抜け出ると、衣と单蒲団^{たんぶとん}（坐禅用座蒲団）を一抱えにして、ひとりまたひとりと禅堂を抜け出してゆく。そして、おののおのが選んだ好みの場所に座をしめて坐禅をするのである。墓地、鐘樓、石上、樹下、洞窟などなどに夜半から明け方までも坐りぬく者もある。これを夜坐^{よざ}という。

夜坐は、顧心^{ごくぜつしん}を起こして本參の公案に勇猛精進する独接心^{どくせつしん}である。特に若干の進歩のある者は一段とこの夜坐に親しみ、みずから力を養う。禅のめざすところは、人々^{にんにん}

具足の仏性への回帰である。大衆禪といわれる枝葉末梢禪や似而非禪であつてはならない。

梅雨不透 通宵坐して 帰らざる（日多義恭句集『無眼子』より）

延寿堂
えんじゅどう

雲水といえども生身であるから、ときには病氣にもなる。まして睡眠も休養も、そして栄養も決して充分とはいえない僧堂生活である。

病僧は禅堂を退いて、延寿堂という別棟の病僧寮に入つて療養する。どうわん同行の友が看護や介抱の世話をしてくれるので、この延寿堂でも書見などはもちろん許されないし、ときには万箭の胸に突きささるような病苦の中にあっても、精神的な鍛練を放棄することは許されない。つねに、病はいづこよりくるか、病む者は誰か、と現成公案に向かつて正念相続することこそ、治療のための唯一最良の方法であると、延寿堂規則



の扁額(へんがく)がかかげられていて、冷ややかに病僧を見おろしている。

道友は薬湯(やくとう)、粥飯(しゃくはん)はいうまでもなく、高熱の場合など夜を徹して看護してくれるが、特に重患の場合は、暫暇下山(ざんかげざん)のうえ入院させて適当な手当を受けさせる。

病僧は、いま現に病み患つているこの肉体に同居していく、しかも病み患うことのないもうひとりの自己（無量寿の法身）(ほうりょうじゅのほうしん)を詮索することを、片ときも忘れてはならない。それが延寿堂入りの心得である。

不幸にしてこの延寿堂で若い生命を終わる場合があつたとしても、眞実の自己にめざめたならば、雲水としては本懐であり、修行者の本望でもある。かりに百歳の長寿を得ても、漫然として過ごした百歳とは比べものにならない充実した人生というべきである。

延寿堂とは、この現身（色身）(しきしん)を養生し、休養を与えながら法身（不滅の自己）(ふめつのはじみ)を具現する修行場でもある。

延寿堂における古人や先徳の厳しいやりとりは、禅話として今も語りつがれていて

大きな教訓を残している。古徳たちは延寿堂で骨身にこたえる法戦^{ほせん}を体験しているのである。

起单留錫

かつて学生運動はなやかなりし一時代に、赤城山で赤軍の活動家によつて行なわれた同志たちへのリンチ行為を、彼らは「総括」と呼んだが、この言葉は当時有名になつたものである。

だがこの言葉は決して彼らのつくつた新語ではない。遠く北魏の時代に編せられた古今の名妃や賢后の「総めくり」で、史誌であり伝記でもあつた。日本流にいうならば「すべくくり」とでもいう著書名であったと聞いている。

雨安居^{うあんご}、雪安居^{せつあんご}が終わりに近い七月と一月の末日には、在錫雲水の勤務評定とでもいうべき「起单留錫」が実施され、総括ならぬ「総めくり」が行なわれ、僧堂の玄関



に「起單留錫」と墨書された札が掛けられる。

平素、不如法の行為（規則違反）のあつた者や修行怠慢者には、手厳しい叱責や注意が与えられる。高單者から末單新到まで順次にひとりずつ、紀綱寮と木札の掛けられた部屋に役位から呼び出される。

部屋には在番の知客つさんがおり、その前に警策（一メートルあまりの檼の棒）が置かれている。ちょっととした閻魔王えんまおうわう廷みたいな風景である。その前に平身低頭する雲水には、この日ばかりはまさに針のむしろである。

中央の知客つさんは、おもむろに開口一番、

「起單か（転出退山） 留錫か（引きつづき在錫か）」
と質問するのである。もちろん、雲水は、

「留錫を願います」

と答えるのだが、そのとたんに他の評席（役づき）から、いささか皮肉を含んだ声で、「貴公さんは起單ではないのか」

などと声がかかる。それには答えず平伏していると、自分では忘れてしまつて いる制せい中の規則違反や、不如法な行為などがならべたてられる。よくもまあこんなに細かな観察をしていたものだと呆れるばかりである。反省のないものに対しては即刻起單を申し渡す場合もある。こつてり油をしぶられた末に、出された起单留錫簿の留錫帳に記名して、やつと解放される。古くは僧の集団生活では、夏末に九十日結制のあとを顧みて個々に自己批判、または懺悔告白ざんげしたというが、その名残りが起单留錫である。自己批判をしない現代では、他人に批判されたことを謙虚に受け入れて向上に資することとなろうか。

講中齋

修行者の至上命令は悟りの眼まなこを開くこと以外にはない。

厳しくも世知辛い世の中に、安神あんじんして修行に専念できるのは、篤信の外護者げいごしゃや信者

の方々の尊い供養によることはいうまでもない。この恩に報ゆる修行者の道はただひとつ、悟りの眼を開くことである。

「報恩の事は更にあることなし、己眼あきらめずんば何をもつてか報ぜん」

の一語は雲水たちひとりひとりへの指針である。

僧堂では春秋二回に信者さきをお招きして、ささやかな報恩謝徳の一いちら会えが設けられる。講中斎こうちゅうさいである。僧堂によってその時期や名称には若干



の相違はあるが、その趣旨には変わりはない。多くは春秋両彼岸の一日が当てられている。

この行事には、全雲水が動員されるほか、縁故のある他僧堂の加担（手つだい）も要請される。案内状の発送、出斎の献立、法要準備、器物の点検など、差定（役配）にしたがって一ヶ月以前から、その段どりにかかる。

場所も手ぜまな僧堂から本坊に移されて行なわれる。本坊の大広間に緋毛氈が敷かれ、一度に三百人てい



どの朱膳がならべられるさまは壯觀である。京都の僧堂の場合は、この日は洛中、洛外、遠くは阪神方面からも信者の方々が參集するため、出斎も二度、三度と繰り返して席が設けられるほどである。

お給仕係の管待供給かんたいきゅう、配膳係の椀頭わんず、料理賄い方の貼案てんあん、炊事係の典座てんざなど、各係も大車輪の活躍である。なかでも典座は大多忙である。一度に一斗炊きする大釜のならぶ前で、仁王さまのようないでたちで働く姿に合掌する信者さんもいて、ほほえましい講中斎の一風景である。

広い本坊の大方丈、りっぱな朱膳、大きな朱色のお椀、盛られた精進料理、雲水たちのお給仕、どの一つをみても、現代の家庭やホテルや旅館や食堂などでは味わえぬ特異の雰囲気である。まことに講中斎ならではの感が深い。見覚えのある日供さきの美人の母娘づれから、雲水たちのアゲアシ取りに目を光らすやかましやの点心さきの老婦人の顔もみえて、日ごろの供養くように感謝をこめて丁重に給仕する。

正午前には一山の和尚さん方の隨喜ずいき（参列）を得て、總供養の施餓鬼法要が厳修さ

れる。僧堂あげて、日ごろの財施に報ゆる法施の一日に、雲水たちは尊い汗を流す。

遠鉢えんばつ——彼岸托鉢

京都の各僧堂では、講中斎の跡始末もそこそこに、翌日より一週間から十日間の予定で僧堂をあげて大阪に移動する。彼岸鉢、大阪鉢などという。浪速っ子はお彼岸坊主というそうだし、大阪寺院の和尚連は、僧堂の遠洋漁業などと軽口を吐くそうである。一衆四、五十名の移動である。早朝、留護（留守役）の在番副司ふうすほか一、二名に門もん送（見送り）された一行は、無言のまま一列雁行で駅に向かう。遠鉢第一日目の風景である。

大阪での会所（宿泊の寺院）へはすでに二名の先驅（先発者）が数日前から出向いていて、周到綿密な準備が手配されている。

遠鉢中の諸行事は、僧堂にいるときといささかも異ならない。変わった点といえば、



朝課諷經（朝のおつとめ）のうちから独參の喚鐘が出されることと、**粥座**（朝食）に
白的（米の飯）の粥がふるまわるていどであろう。午前中は托鉢、午後は信者さき
の彼岸誦経の繰り返しである。点心、**薬石**（夕食）ともに信者さきのご馳走づくめで、
遠鉢中は雲水たちの目方が増える。

午前中の托鉢は四人一組で編成されて、船場、堂島、築港、天満へと散つてゆく。
浪速は商都であり、商人の街だといわれる。その挨拶も「モウカリマツカ」と激しく
厳しい。この浪速人の「モウケのウワマエ」をいただく托鉢も、おのずから激しく厳
しいものになる。まして大阪の台所といわれる市場内の托鉢では、軒鉢けんぱつと称して店ご
との軒先で「ホオーツ、ホオーツ」と大声を出して立ちどまる。

朝の市場街は活気があふれ、喧騒を極める。ときには「邪魔くさい坊主や」と怒鳴
られるが、悪水鷺頭（悪口をあびせられること）も馬耳東風、無神經の顔つきで、も
らうまでは退散しない忍辱没我にんじくもつがの托鉢行である。威勢のいい魚市場などで、手近の商
売ものの蟹を一尾差し出されることも珍しくない。ありがたく頂戴して如法に低頭し、

片手に魚をさげる。そのまま隣の店の前に立つ雲水の姿はちょっとした絵になる。

午後からは、草鞋わらじを下駄に履きかえて、信者さきへの誦經すきようである。

道中は一列雁行がんこうの四、五十名の雲水の行列である。交通信号に両断されても、先頭は速度をゆるめないし、振り返らない。誦經さきは広い部屋もあれば、狭い部屋もある。雲水は総勢何人であっても、臨機応変に座をしめる。雲水ほど伸縮自在なものはないと感心させら



れる。

大阪鉢の所得は僧堂の庫下（台所）を大いに潤す。また、誦経の布施は喰金といわれ、雲水たちに平等に配分され、在錫中の衣資（ござかい）にあてられる。だから、彼岸鉢は雲水たちの待望の行事でもある。

施餓鬼

施餓鬼は、別名を水陸会ともいいう。その起原は遠く釈尊在世の時

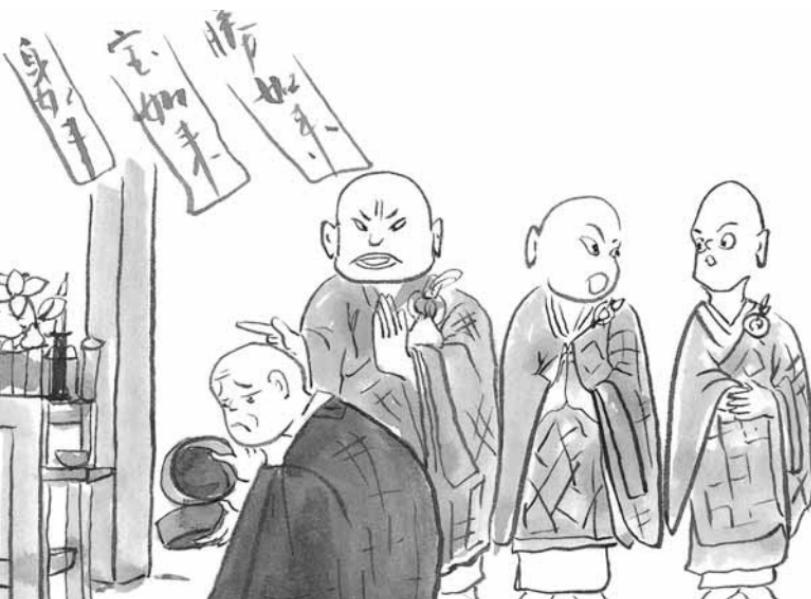


代といわれ、現在に及んでいる。ときは衆僧自恣の日というから、修行期間である九十日結制の安居が解けた日の七月十五日に相当する。

禪宗の本山ではいまもこの日に山門施餓鬼が厳肅に修行されている。

僧堂の水陸会は主として春秋の両彼岸に行なわれる。この日は本堂前の広縁に、甘露台が設けられ、段の周囲は諸仏の名号が記された数流の幡で莊嚴（かざる）され、青竹で囲まれて、見るからにすがすがしい。

台上には「三界万靈」と大書された



位牌が祀られ、その前に水陸の幸、わかめや昆布、ときの野菜など、そして餓鬼飯といわれる飯が大鉢に高々と盛り供えられている。

微風にそよぐ五色の施餓鬼幡、ゆらぐ香煙、灯燭。施食会の舞台がととのい、登場人物の諸仏、諸鬼神がそろつたとき、鐘声裡に独特のハーモニーと旋律で衆僧によつて陀羅尼が唱えられ、如来のみ名が唱えられるなかを、僧たちはつぎつぎに甘露台に進んで、供物にささやかな洒水をする。洒水とは、食物を口まで運ぶと焰になつて燃



えるので、いつまでも空腹が満たされない餓鬼たちのために、その焰を消す水を手向けることだと伝え聞く。

そしてさらに読経と祈りはつづけられる。

「発心して一器の淨食を奉持して恒沙の餓鬼に供養する。曠野の諸鬼神らよ、ここに集まり来てこの食を受け、むさぼりの心を捨てて、速やかに六道輪廻の苦しみから解脱し、無上正等菩提を成就されたい。また存者は福樂にして寿はきわまりなく、亡者は苦を離れて安養に生ず」

等々である。施餓鬼は誰がために行なわれるのであろうか。生者と死者、幽界と現世との感應道交が、はたして行なわれるであろうか。施餓鬼に出頭した雲炳しゆへいたちの内心に去來する疑問である。餓鬼や鬼神を認めるのは通俗宗教の範囲で、他仏を否定する禪本来の姿からはほど違いなどと思いながらも、自己の中に菓食つてゐる、あくことを知らぬ自己愛こそ、餓鬼道へまつしぐらだと、ひとり合点するのも僧堂の施餓鬼の日である。

高橋勇音 (たかはし・ゆうおん)

明治 44 年、長野県松本市に生まれる。京都の花園専修学院を卒業後、紫野大徳寺僧堂で修行。終戦後に復員して、昭和 23 年、松本市浅間温泉神宮寺住職となる。平成 6 年に逝去。世寿 81 歳。著書に『凡僧日記』(河出書房新社)。

長門義明 (ながと・ぎみょう)

昭和 12 年、京都府に生まれる。花園大学を卒業後、埼玉県の平林寺僧堂にて修行。高校時代より人見少華先生について、南画を学ぶ。京都府八木町瑞雲寺住職。著書にマンガ「ダルマさんが坐ってござる」(淡交社)。また、毎日放送のドラマ「ピュアラブ」を監修。

新装版 **かたつむりの詩** ——^{うた}禪堂つれづれ物語——

平成 15 年 3 月 1 日 第 1 刷

著 高 橋 勇 音
画 長 門 義 明
発 行 禅 文 化 研 究 所
印 刷 (株) 耕 文 社

京都市中京区西ノ京壺ノ内町 8-1
花園大学内 Tel 075 (811) 5189

©1984 Yūon Takahashi, Gimyo Nagato

ISBN4-88182-164-4 C0015

禅文化研究所の本
www.zenbunka.or.jp

禅の教養誌

季刊 禅文化

年四回発行（一、四、七、十月の25日）

禅の思想と生活、および禅の文化・美術をいろいろな角度から探求しようとする人々のための禅の教養誌。禅の基本的な見方を現代的に理解するために、また禅の文化を読者に紹介するためにつとめています。

坐禅の入門書

坐禅のすすめ

山田 無文・平田 精耕他著

全国の禅会などの最新情報を掲載。多くの写真、図版で分りやすく坐禅の仕方、禅会での作法を説明する。これから坐禅を始める人のための格好の入門書。

ほんとうの自分とは何か

自己を見つめる

山田 無文 著

禅とは何か。何のために人は生きるのか。眞の教育とは。眞実の自分を、静かに見つめてみる。現代を生きるすべての人々に、禅のこころを親切をつくして語りかける、無文老師の代表的法話集。

¥1,900 B6判・330頁	¥1,300 A5判・224頁	年間購読料 ¥5,000
ほんとうの自分とは何か	禅のすすめ	禅の思想と生活、および禅の文化・美術をいろいろな角度から探求しようとする人々のための禅の教養誌。禅の基本的な見方を現代的に理解するために、また禅の文化を読者に紹介するためにつとめています。

<p>禅門逸話選 全三巻</p> <p>禅文化研究所 編</p> <p>上・中¥2,800 下¥2,600</p>	<p>抱腹絶倒 意味深長</p> <p>せんもんいつわせん</p> <p>細川 景一 著</p>	<p>絵で見る禅の修行生活</p> <p>うんすいにつき</p> <p>雲水日記</p> <p>佐藤 義英 画・文</p>
	<p>四季折々の禅語、約二三〇を読み説く。多忙な日常生活の中でこそ生かしたい禅語の妙味。興味深い多くの挿話・逸話などをまじえながら、禅語を通じて真心を見つめる智慧を、わかりやすく説く。</p>	<p>禅堂入門から僧堂生活の歳時記まで、平素は固く門を開ぎし俗人の入るのを許さない僧堂生活を、九十六枚の飄逸な画で活写する。巻末に天龍寺派管長平田精耕老師の解説を加える。</p>

禅文化研究所の本
www.zenbunka.or.jp

<p>毎日を豊かにすこすための東洋の智慧</p> <h2>禅と東洋医学</h2> <p>花園大学仏教学科 編</p>	<h2>禅の寺</h2> <p>阿部 理恵 著</p>	<p>禅寺ガイドブック</p> <p>山田 無文 著</p>
<p>盛永宗興、河野太通、伊藤真愚ら、禅と東洋医学のそれぞれの立場の人間が、仏教と東洋医学との出会いから、近代合理主義の思想に基づいた身心一元論を展開する。</p>	<p>臨済宗・黄檗宗の十五本山を、開山禪師の生涯を中心に、各本山の歴史・文化財・年中行事などを紹介する。豊富な写真資料を通して、旅情豊かに学べる、これまでにないユニークな禅寺ガイドブック。</p>	<p>本文二六二文字に集約された仏教の真髓を、無文老師が一人ひとりに語りかけるように、分りやすい言葉で解き明かす。 神戸祥福寺大衆読経による般若心経のカセツトテープを謹呈。</p>



小山茶花

丁巳年夏月
王穀祥書